

教職概論(12月13日)の記録

投稿日 2016年12月13日 作成者 labouchi

昨日(12月13日)の教職概論では、前回の講義内容の「授業で勝負(アメリカ) VS 「子どもの心をつかむ」(日本) 及び「チームとしての学校」 VS 「担任が責任を持つ」の対立意見に関して、リアクションをもとに再度考えてもらった。学生たちの意見は、教師は「子どもの心をつかむ」及び「チームとしての学校」への賛成者が多かった。

それに対しては、異分野のひととのチームはいろいろ難しいこともあること(前者)、及び校長の権限が大きくなり教師の裁量権が減るという問題のあること(後者)を指摘した。前者に関しては、向山洋一の「教育技術の法則化」運動に関する資料を配り、教師は熟意や思いやりだけでは、医療技術の未熟な医者と同じで、クライアントから見向きもされず、教師にも高度な教育技術と知識が必要なることを話した。その資料と学生のリアクションを記録に残す。(この日は、千葉県の2017年度の教職教養の試験問題もやってもらい自己採点を報告してもらった)

img_20161214_0001

学校組織、学校文化

投稿日 2016年11月29日 作成者 labouchi

今日(11月29日)の教職概論の授業の記録を残しておきたい。まず前回の授業の確認(「教育調査」に関するリアクションの抜粋を使い、前回の内容の確認とリアクションへのコメント)をした。教育調査のことは、教員採用試験には出ないであろうが、教員になった折、教育研究指定校の校内研究や個人の研究の時には、実証的データを集める時が多く、それに役立つであろう。ただ現在も教育委員会や教育現場では、教育調査への素養がほとんどいかなることを話した。

そのあと、今日の講義テーマ(「教育組織、学校文化-教育の官僚制と教員の専門職性」)に関連して、教員採用試験の教職教養の問題を少しやってもらい、このような教育法規に関することは、教員採用試験に向けて勉強する必要があるが、実際の教育現場ではこの通りでないことも多いことを話した。

この分野で私の以前に書いたもの(添付)も読んで考えてもらい意見を求めた。(リアクションの一部を添付)

img_20161129_0001

大学生の4類型

投稿日 2016年11月24日 作成者 labouchi

学生を2つの軸で4つに分類できるのではないかと、ふっと思った。

1つの軸は、勤勉かどうか。授業に遅刻せず皆勤で熱心な受容態度の学生(A)とその逆(遅刻多く休みがちで受講態度もよくない)学生(a)。

もう一つの軸は、頭の回転がよくセンスもある学生(B)とそれがない学生(b)。

この二つの軸を交差させ、学生の4類型(AB,Ab,aB,ab)を作ることができる。

ABは、いわゆる優等生なので問題はないであろう。ただあまり面白味はないかもしれない。

Abは、コツコツ努力する学生で、時間にかかるとかもしれないが、いつか芽が出るであろう。

aBは、教員にとっては少し取り扱いづらい学生だが、能力もセンスもある学生なので、それを何とか伸ばしてやりたいし、伸ばしてほしいと思う。

abは、大学に来て意味がなかったのと思うが、高い授業料を払ってくれている「お客様」なので、むげに扱うわけにはいかない。個人的に話してみても、それぞれいい面をもっていることがわかる場合が多い。

幼稚園生と大学生

投稿日 2016年11月24日 作成者 labouchi

藤原伸代「子どもの発達から教育を考える」(『教育の基礎と展開』第3巻、学文社、2016年)の中に、幼稚園児の園の授業風景のことが書かれている。

幼稚園児たちは園で2つのことを学ぶ。1つは、「教室での学習場面の成立を可能にする教室ルール」(具体例で上げているのは、挙手-指名のルール)。

もう一つは、「二次的ことば」を使うこと。「二次的ことば」とは、「一次的ことば」(=「具体的な事例について、状況の文脈に順りながら、親しい人と直接対話によって展開する言語活動」)とは違い、「状況の文脈を離れ、抽象化された聞き手一般を想定し、話の筋は自分で調整し、ことばの文脈で使うことば」である。つまり二次的ことばとは、教室での発言や発表の時使うことばを身に付けるということである。

幼稚園児が園で学ぶこの二つのことがらのことに思いを馳せると、今の大学生はこの二つのことが学んでいるかどうかと疑問に思う場面に出会うことがよくある。

第1の「教室ルール」について、大学の授業という場で、私語やスマホいじりが頻繁にみられることである。これは、3歳の園児がまだ幼くて、教室で今なされていることやルールの理解がずす、自分の好きなことをやってしまいうのに似ている。3歳児でも教室ルールを理解しそれに従うことのできる子もいるので、私語やスマホいじりをしている大学生は、それが理解できない3歳児以下の能力しかないといえる。

第2の「二次的ことば」でいえば、学生を指名して発言を求めても、無言が、友達に話すような小さなつぶやきし返ってこないことが多い。これも3歳児が学ぶ「二次的ことば」がまだ身についていない証拠と思ってしまう。

大学は自由な場であるが、その自由は、無知からくる幼い子と同じ行動をすればいいということではない。大学生には大学生の発達段階にふさわしい行動があるはずである。

学生のグループ発表

投稿日 2016年12月12日 作成者 labouchi

大学の演習(ゼミ)などで、学生にグループ研究の発表をしてもらうと、なかなかいい発表になることが多い。今は、インターネットでいろいろ調べられるということもあるが、その内容もさることながら、発表のプレゼンが上手で、思わず聞き惚れる。

今週の敬愛の2年生の専門研究の演習では、「子どもとマンガ」という題で、大学生に対して実施したマンガに関するアンケートの結果の報告の他に、マンガに関する学生たちの知識の広さや思いの深さ(好きなマンガ本のシリーズを揃え、繰り返し読むという学生も多い)を知ることができた。マンガの内容を一人が語り、それをめぐってさまざまな議論と笑談が飛び交う学生の様子は、私の教育の話聞く時の様子と大違い。心から楽しんでいる。

「マンガは創造力を育む」という学生の説明に、私は「マンガは映像から人の心理を想像するのに対して、小説は文字から場面(映像)を想像するので、その想像(創造)力の方は逆。どちらも大切」とコメントするががせいぜい。

皆が読んでいる『ワンピース』についてひとしきり議論があったが、読んでいない私にはちんぷんかんぷん。昔読んだあだち充の『タッチ』についても詳しく読んでいる学生がいて、その登場人物の関係について大変な盛り上がり。(私も藤村正之氏の『タッチ論』*を読み返してみようと思った)。

御宿 ゼミディキャンプ

投稿日 2016年11月14日 作成者 labouchi

昨日(11月12日)は、天気も回復し、敬愛の2年ゼミで御宿ディキャンプを実施。最初は宿泊会宿の予定が諸般の事情で1日のディキャンプとなった。

それでも御宿歴史民俗博物館の見学、寿司たなかでのランチ、メキシコ船運援助記念塔の見学、御宿海岸での運動(バレーボールと野球)、室内での卓球、自分達で料理してのパベキューと充実した内容になった。参加は男子学生ばかり10名だが、皆20歳と若く、元気一杯で、よく食べよく飲み(ただアルコールは控えめ)、よく運動した。大学時代のよい思い出になってくれれば、うれしい。



大学の実学志向、産学共同について

投稿日 2016年12月17日 作成者 labouchi

現在大学の研究や教育も実学志向が濃厚で、大学以外の実社会との連携が盛んに提唱されている。

大学教員も実社会の経験者が重宝がられ、現場経験が評価され大学教師として採用されることが多い。学生も実経験のある教員の授業を有難がり、また企業や教育現場でのインターンシップやボランティア活動かが、大学時代に一番役立ったと感想を述べる人が多い。

今の大学では、学生の就職実績を上げようとキャリア教育に力が注がれている。産学共同という言葉は手放して称賛される。

このことは、1960年末の「大学紛争(闘争)」を経験した世代からみると隔世の感がある。その時代は、公害問題で工学系が、そして薬害問題で医学や薬学の分野が、そして人文系でも大学の研究や位置が、社会の中で「被害者」の役割を果たしていなかったが厳しく問われた。大学の産業界や政府との連携はタブーであった。それに対して今は、大学の実学志向や産学協同が手放しに称賛される時代になっている。しかし現実をリアルに感じるということは、必ずしも現場との連携や経験が多ければいいというわけではない。

「産学共同」は、下記の新聞記事にある軍事研究のみならず、人文系の分野でも批判的精神を失い、学問の質を押し進めることにならないかと危惧される(ただこのことは、現実から遊離した論議にふけられないというのとを意味しているわけではない。)

img_20161217_000

大学教育の意味

投稿日 2016年12月17日 作成者 labouchi

非常勤先の大学(神田外語大学)で教職科目の「教育社会学」を教えていて、「あれ!」と思うようなことがあった。

かつて私が教えていた上智大学の教育学科のようなところでは、「教育社会学」は教職科目ではないので、教採用試験に出るとか教師になって役立つことかということ意識しなくてよかったが、教員養成の為にある科目ある大学の場合、そのような実利的な効用を意識せざるを得ない。学生もそれを期待して受講しているのだし、実利的な目標を設定することは、そんなに悪いことではない。

そこでは私の著書の『学生文化・生徒文化の社会学』(ハーベスト社、2014年)をテキストに学生に発表してもらっているが、この2回はたまたま大学や大学生文化を扱う章(1章~4章で、発表内容と議論が、大学生活の実態や大学教育の意味といった、教職とは関係のないこととなった。

発表の後の少人数の討論の後の感想を聞いていると、「大学とはどのような場なのかいろいろ考えさせられた」「大学は何をしようが自由な場で、その時間を有効に使いたい」「将来の安定確保の為に教員免許を取っているが、それでいいのか迷うようになった」「語学はあくまで、何かを学ぶための手段であり、それを使って何をしようかいろいろ考えている」など、実利的なキャリア(将来の職業)の為でない、大学や学生の本来のあり方への模索や理解がなされていることを知り、教える側として大変うれしく感じた。このような実利でない大学教育の意味を、私もしばらく忘れていたように思う。

大学教員って

投稿日 2016年11月15日 作成者 labouchi

教育を受ける側は、児童(小学校)、生徒(中学、高校)、学生(大学)と名称が違っているが、教える側の教員(教師)は、小中高大で何か違うのであろうか。

教員志望の学生は、教職を希望する理由に、いい教員との出会いをあげることが多い。大学の教職の授業で学生に「思い出の中の先生」という話をして、「自分は小中高という先生に出会い大きな影響を受けたけれど、それに「思い出の中の先生」という話をしたところ、「ではなぜ先生は(大学の)教員になったのですか?」と質問される。その場合、学生は大学教員も小中高の教員と変わらないという意識で質問してくる。

確かに学生からみると小中高の教員も大学の教員も授業をやる人として変わらないのであろうし、また昨今の大学の改革や大学の雰囲気から教育重視に傾いているので、小中高と大学の教師の違いはない、と感じられて当然なところがある。

潮木守一教授の『キャンパスの生態誌』(中公新書、昭和61年)の中に、大学の3類型が鮮やかに描かれている。それで言えば、知識や技術を教える「自動車学校型」や、生き方を教く「予言共同体型」の大学であれば、小中高と変わらないであろうが、研究中心の「短のコミュニケーション型」の大学こそ大学らしいとなると、そのこの教師は小中高の教師とは違うのではないかと。

大学の教師は教育だけでなく、研究もしているということを、今の学生は知らないのではないかと感じることがある。これは学生だけでなく、一般の人々、文部官僚も、果ては大学教員自身も忘れてかけているように思う(自戒も含めて)。

かわいい日本文化について

投稿日 2016年12月12日 作成者 labouchi

日本でなぜアイドルに人気があるのか。また「かわいい」文化がもてはやされているのか、よくわからない。また、最近では海外でも、日本の「かわいい」文化やアイドルの人気が出ているという。それは何故なのだろう。

2日ほど前のNHKの番組で、イギリスで日本のかわいいアイドルに人気が出ているのは、イギリスでは少しく早く成熟したセクシーな女性になるように少女達に圧力がかかる中で、それに抗する少女たちが日本のかわいいアイドル文化にコミットし、それを模倣しようと考えた方が多いのかもしれない。現地からの報告があり、そのような側面もあるのかと考えさせられた。

日本で若い男性がアイドルに熱を上げるのは、アイドルの女性性(セクシャリティ)に惹かれるかと思っていたが、必ずしもそうではなく、女性の幼さやかわいさに惹かれているのかもしれない。「だから(今どきの男の子は)いつまでも人前の男にれない」など野暮な見方をするのではなく、かわいさと女性性の微妙なバランスを歪む風流な日本的感性が受け継がれていると考えた方がいいのかもしれない。

「かわいい日本文化」という言葉で検索すると、日本のかわいい文化に関する様々な見方や論議が出てくる。

卒業生のI氏より、くしばらく前に加藤典洋氏がこんな論考を発表していました。ご参考に>というコメントがよせられた。感謝したい。

http://www.the-american-interest.com/2006/09/01/goodbye-godzilla-hello-kitty/>



感謝することが大事

投稿日 2016年12月18日 作成者 labouchi

井上揚水「感謝知らずの女」という歌がある。

http://j-lyric.net/artist/a00071f/16100fe.html

これだけ私はあなたの為につくしているのに、あなたから「ありがとう」の一言も返ってこないという恨みしい内容である。(後半は別の感情を歌っているのかもしれないが、。)

このような感情は、人に対してだけでなく、属している組織(会社等)に対しても、人はいつも感じているであろう。

しかし、逆の立場からみれば、相手(人や組織)も同じこと(「感謝知らずの男」)を感じているのではないかと、ふっと思った。(これは夢の中で思ったことだが、記録に留めておきたい)

